

日本に限らず、一般に過去の東洋社会では、秩序ある幾何学、中でも立体幾何学、の発達する土壌にきわめてとぼしかつた、とよくいわれる。つまり、多面体などという冷酷な数学的論理の結晶は、うつろいやすくはかない日本の情緒の中では、育つはずがない、というのである。

はたして、そうであろうか。

現在でも、ふと街角で見かける伝統的なてまりや折り紙、七夕や正月に家々を飾るくす玉、夏の夜空を支配する大きな花火など、いずれも、その苛憐な美しさは、多面体の持つ対称性に根拠を置く。

だからこそわが国の誇る和算の世界でも、十七世紀に入つてからではあるが、相当複雑な多面体を列挙し、その形のおもしろさをめぐる。

それどころか、多くの日本人が信仰する仏教や神道に、いつの間にか多面体の姿が色濃く投影されてきた。いつ、だれが、何のために、そのような伝統を育てたのかは、だれも知らない。

しかし、仏教の源流をなしている平安時代からの真言密教では、五つの正多面体を五輪塔や曼荼羅図に閉じ込め、開祖空海の足跡を巡礼する人々は、空海をしのんで、ある特定の多面体模様を見せるてまりや折り紙を、きそつて供える。

うら盆会には、宗派を問わず、四角柱や六角柱の灯籠が、先祖の霊を送るが、その中で、立方八面体をした切籠灯籠は、特別の価値を持たされている。盆以外には、ほぼ絶対的、外へ出ないのである。鎌倉時代ごろからの慣習らしいということが解つているだけで、何の意味を持つてい

るのか知るすべもない。

そして、そのような伝統ができるまで前から、寺院の主要な堂宇は正八角形の平面にすることがあつた。貴人の古墳が正八角形であることもまれではない。

じつは、わが国が飛鳥時代から奈良時代を迎えていたころ、中国には、国を生んだ二人の神人に関する伝説があつた。それを今に伝える漢代や唐代の壁画では、男神の手にはいつもコンパスが、女神の手にはいつも定規が持たされている。コンパスは円、天、男子を表わし、定規は正方形、地、女子を表わすのである。それがわが国に影響を与えないはずはなく、宇宙は天円地方といわれ、前方後円墳が造られ、聖徳太子の手には、場合によつて曲尺が輝やく。そして、正八角形は、たんに形がかわつていだけではなく、円と正方形の中間図形として、きわめて大きな意味を持つていたのである。

だからであろうか、神社で神体と崇められるのは、正八角形や円形の鏡でありもつと原始的には、球状の石塊であつた。

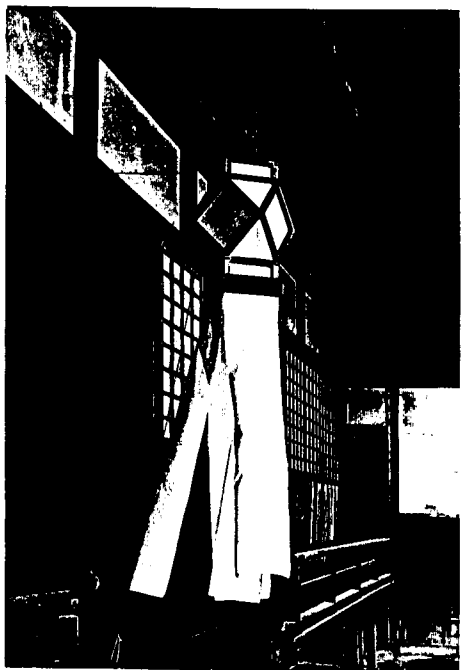
このような、円と正方形、あるいは、密教における正多面体的な図像や、それを説明する経文を考えれば、わが国の伝統的な文化の根底における幾何学、それも、立体幾何学の存在を無視できなくなるであろう。

その、みごとな証拠を、歴史学者滝沢真弓博士は、われわれにつきつける。

つまり、紀元前五世紀ごろの古代ギリシャの哲人プラトンの幾何学の世界が、わが国をも包込んでいるといのである。プラトンは「ピレゴス」の中でいう。「この世で真に美しいものは、コンパスと定規によつてのみ生み出される」と。また、「テイマイオス」の中でいう。「宇宙は、四つの元素と、それらを入れる器からなり、その合計五つは、五つの正多面体の形を持つ」と。

ちなみに、さきに触れた切籠灯籠の形については、十三個の半正多面体の中で、ただ一つ、プラトンが詳細に解説しているのである。

偉大なプラトンの、キリストや釈迦をも凌駕する全地球上への影響力を考えれば、滝沢説に、おそらくは、異をさしはさむことはできないだろう。そして、難解な理屈とは関係なく、多面体の持つ、華麗で清楚な美しさは、われわれ日本人の心の奥に、気付かれはしなくても、いつまでも生きていくほどの魅力に満ちている。



SCL. 70

切籠灯籠

高野山金剛峯寺



SCL. 71

五輪塔

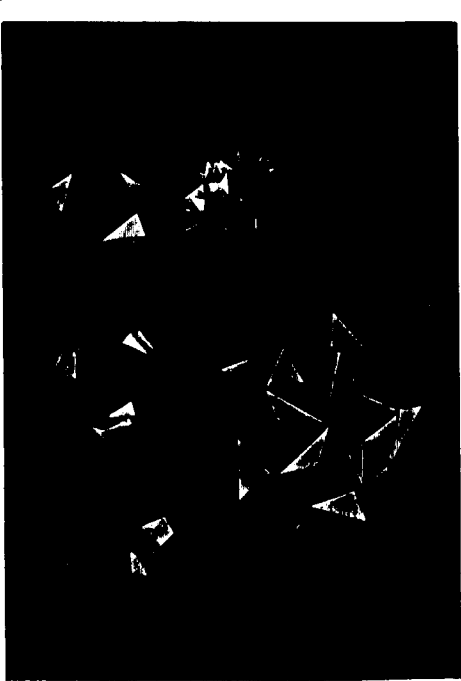
東大寺伴墓



SCL. 72

てまり

浦田清子氏作



SCL. 73

折り紙

寺田徳重氏作